

「授業のできない学校」まで出現！ 「先生不足」が招く“学校崩壊”。

授業ができない！

先日ある保護者の方からこんなメールが届きました。

中1の娘が、音楽の先生がずっと休んでいるので「音楽の授業が全然ない」と言っていて心配です。どうなっているのでしょうか？

「先生がずっと休んでいて授業が全然ない」というのです。「どうなっているの？」「学校や教育委員会は何をしているのだ！」と疑問を持たれて当然です。

でも、学校も何もしていないわけではありません。八方手を尽くしても「先生がみつからない」のです。

藤沢だけではありません。6月13日の日本教育新聞にはこんな記事が載りました。「中学14%に授業できぬ教科」という驚くような内容です。いま全国の学校で「授業ができない」という、たいへんな事態が起きているのです。

授業ができないだけではありません。6月18日の朝日新聞には「担任見つからずに1カ月半」という記事が載りました。

神奈川県内のある小学校に勤める教諭はこの春急にクラスを受け持つことになった。担任になる予定だった教員が休むことになり、1人欠員となったためだ。……

校長のつてで代替りの担任が見つかったのは1カ月半後。「代替りの教員がいつ来るのか」。この間、保護者からの電話もあった。「正直、きつかった。子どもたちもなかなか落ち着かず、もやもやした様子が見て取れた。教員不足による子どもへの影響が明らかに出ていると 感じます」

これも特別な例ではありません。最近、先生たちと話をすると、まず最初に出てくるのは「先生が足りな

い」という悲鳴のような声です。

なぜ「先生不足」が起きたのか

なぜ「先生不足」が起きているのでしょうか。様々な原因がありますが、ひとつは若者の「教員離れ」です。

小学校			中学校		
	応募者数	応募倍率		応募者数	応募倍率
24	2,073	4.8	24	1,966	8.2
25	1,895	4.2	25	1,880	7.2
26	1,859	4.4	26	1,743	7.9
27	1,805	4.3	27	1,710	7.4
28	1,655	4.5	28	1,599	7.3
29	1,636	4.5	29	1,609	7.5
30	1,504	4.2	30	1,352	7.1
1	1,386	3.9	1	1,333	7.0
2	1,269	3.7	2	1,201	5.0
3	1,129	2.6	3	1,177	4.3

神奈川県教員採用試験の応募倍率の推移

上の表は神奈川県教員採用試験の応募者の推移です。この10年でほぼ半減しています。理由は“6割が過労死ライン越え”と言われる先生の多忙が敬遠されるようになったから、と考えられています。いまや若者にとって先生は「なりたくない仕事」なのです。

一般に倍率が2倍を切ると「危険水域」と言われますが、小学校は危険水域が目前です。

では中学は安泰かという、事態はもっと深刻です。美術は1.3倍、技術に至っては1.0倍と危険水域どころではありません。受験者を全員採用できるわけではありません

	応募者数	応募倍率
国語	97	2.6
社会	239	8.5
数学	164	6.6
理科	119	4.8
音楽	57	3.6
美術	21	1.3
保健体育	292	9.1
技術	10	1.0
家庭	26	2.2
英語	152	4.0

中学校の教科別倍率

んから、現実定員割れを起こしているはず。現実定員割れを起こしているはず。現実定員割れを起こしているはず。

加えて私が危惧するのは国語の2.6倍です。国語はあらゆる学習の基礎ですから、国語の倍率がこれ以上低下すればその影響は計り知れません。

このような傾向は神奈川だけではなく。9月9日、文部科学省は2022年度の教員採用試験の倍率が過去最低を更新したと発表しました。

新しい先生のなり手が減れば退職者の補充ができず、

「中学14%に授業できぬ教科」
末富・日大調査 教員不足が影響

教員不足の深刻な現状を踏まえ、本誌は「授業できない教科」という驚くような内容が載りました。これは、全国の学校で「授業ができない」という、たいへんな事態が起きているのです。

